

# 主題関係と動詞句副詞

## Thematic Relation and VP Adverbs

西村 知修

Tomomichi NISHIMURA

### 0. はじめに

本稿は英語の動詞句の構造と主題関係、動詞句を修飾する副詞の解釈に関して考察を行うものである。本稿で問題となるのは、例えば次の (1) のようなものである。(1) は様態の副詞 *gently* が文中の異なる位置に生起可能であることを示している。

- (1) a. We *gently* rolled the ball down the hill.  
 b. We rolled the ball *gently* down the hill.

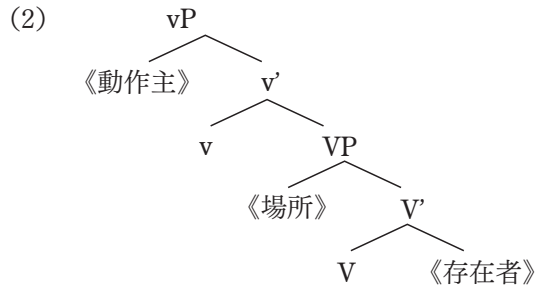
(Radford 1997 : 371)

*gently* の生起位置が異なるということは、統語構造も何らかの形で異なるということになり、統語構造が異なるのであれば意味も異なることになる。実際に、(1a) はボールの転がし方が穏やかであったというのに対し、(1b) ではボールの転がり方が穏やかであったという意味になる。1節では、動詞句の基本構造として加賀 (2001) や Kaga (2007) にみられるような主題階層を VP-shell に組み込んだ構造と、Travis (2010) が想定しているような split VP 構造を組み合わせた動詞句構造を仮定する。2節では、1節で仮定した主題階層を組み込んだ動詞句の構造が、動詞句修飾の副詞の生起位置と解釈をどの程度予測できるのかを確認していく。3節では、従来の分析では特殊な分析が必要だった現象を、動詞句に組み込まれた主題関係から特別な規定なしに分析できる可能性を提示する。

### 1. 動詞句構造・主題関係と副詞の位置

1節では動詞句の基本構造を考察する。ここではまず、動詞句の構造として本稿が採用する加賀 (2001)・Kaga (2007) の主題関係に基づく VP-shell 構造について見ていくこととする。生成文法は現在ミニマリストプログラムの指針のもと、D 構造や S 構造などは廃止され、二つのものを組み合わせる併合 (Merge) と呼ばれる操作によって統語部門において文が組み立てられると考えられている。その併合が動詞句内においてどのような順番で行われるのかということに関して示唆を与えてくれる提案の一つが Baker (1988) の主題役付与一様性の仮説 (uniformity of theta assignment hypothesis)、UTAH である。これは GB 理論の中で提案されたものであり、意味役割が統語構造に反映されることを規定したものである。意味役割とは、動詞や形容詞などの述語の意味を成立させるために必要なものであり、意味役割を担う名

詞などは項と呼ばれる。意味役割は主題関係とも呼ばれる。しかし、具体的にどのような意味役割がどのようにして統語構造上に反映されるのかという点について Baker (1988) は明確にしていない<sup>1</sup>。そこで本稿では、加賀 (2001) や Kaga (2007) で提案されている以下のような主題関係を組み込んだ VP-shell 構造を基本として考える<sup>2</sup>。



(加賀2001: 127より一部省略・変更して引用<sup>3</sup>)

(2) によると、動詞句を組み立てるときにはまず動詞と《存在者》の意味役割を担う項が併合し、次に《場所》を担う項が併合する。さらに使役化を担う軽動詞が併合し、そこに《動作主》を担う項が併合することで動詞句の基底構造が出来上がる。すなわち基底構造では常に《存在者》、《場所》、《動作主》という順番で意味役割を持った項は併合していくことになる。この基底構造から様々な要請によって移動が生じ、様々な語順の動詞句が生じると考えられる<sup>4</sup>。(2)における《存在者》《場所》《動作主》はマクロな意味役割であり、従来から提案されている様々な意味役割を三つにまとめたものである。《動作主》には従来の〈動作主〉や〈原因〉が含まれ、《場所》には〈場所〉、〈着点〉、〈起点〉、〈経路〉、〈受益者〉、〈経験者〉、〈被動作者〉が含まれる。《存在者》は従来の〈主題〉であり、移動物、出現するもの、存在するものなどが含まれる。マクロな意味役割は加賀に従って《 》で、従来の意味役割、すなわちミクロな意味役割は〈 〉で表わすことにする。加賀の提案で特徴的なのは、従来〈場所〉の意味役割が与えられてきた人やものの内在的特徴、または一時的状態を表わす叙述形容詞や叙述前置詞を〈主題〉、すなわち《存在者》として扱う点である。ここでは根拠の一つとして加賀が挙げている there 存在文への生起可能性を挙げておく<sup>5</sup>。

- (3) a. There is a man in the room.  
 b. There are some scorpions belonging to Simon.  
 c. ??There is a man healthy.  
 d. ??There is a man in good health.

(加賀2001: 108)

<sup>1</sup> ミニマリストプログラムの枠組みで UTAH がどのような扱いを受けるのかについては議論がある (cf. 藤田・松本2005)。

<sup>2</sup> Hale and Keyser (1993) などの研究によって VP-shell 構造によって様々な統語現象が説明された。VP-shell 構造は Chomsky (1995) をはじめとして広く採用されている。

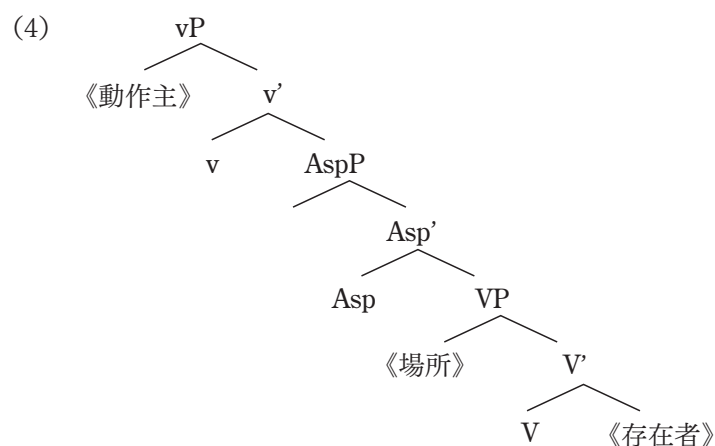
<sup>3</sup> 加賀 (2001) は上位の vP を VP1、下位の VP を VP2としているが、本稿では MP にて標準的に採用されている vP、VP での表記をする。加賀が vP 表記を採用しない理由については加賀 (2001: 154-155) を参照されたい。

<sup>4</sup> ミニマリストプログラムにおいては移動も併合の一種である内的併合だとされているが、本稿では移動という表現を使うこととする。

<sup>5</sup> 具体的な様々な構文での加賀の提案の有用性について、加賀 (2001) および Kaga (2007) では結果構文、与格交替構文、中間構文、場所格倒置構文が扱われている。藤本 (2009) では結果構文の更なる分析、藤本 (2014) では場所格交替構文、場所格倒置構文、there 構文などが扱われている。

存在文という名の通り、主語が《存在者》であれば *there* 構文に生起できるはずであり、従来の理論であれば *a man* がその《存在者》を担うため、(3) の例はすべて問題のない文のはずであるが、実際は (3c) (3d) はよくない。つまり従来の意味役割理論では (3c) (3d) の容認度が低いことを予測できない。しかし加賀の理論では (3c) (3d) で《存在者》を担うのは *healthy* や *in good health* の方であり、*a man* はそれらの状態が存在する《場所》と解釈することになるので、(3) の文の容認度に差が出ることは不思議ではなくなる。

動詞句の構造として、本稿ではさらに分離動詞句仮説を採用する。基本となる動詞句構造と主題関係は (2) を想定するが、(2) の構造は目的格の照合の仕組みが不明瞭な部分がある (cf. 藤本2014)。そこで本稿では分離動詞句構造を仮定し、その具体的な構造として *vP* と *VP* の間に機能範疇 *inner aspect phrase* (*AspP*) があると考えた Travis (2010) を採用する。*AspP* は目的格の照合と *VP* の意味に基づくアスペクト特性の区別を行うものであると Travis は想定している<sup>6</sup>。加賀の *VP-shell* 構造に Travis の *inner aspect phrase* を組み込んだ動詞句構造は藤本 (2014) において提案されているものである。この動詞句全体の基底構造は (4) のようになる。*AspP* の指定部の位置は目的語が格の照合を行うために移動してくる位置である。

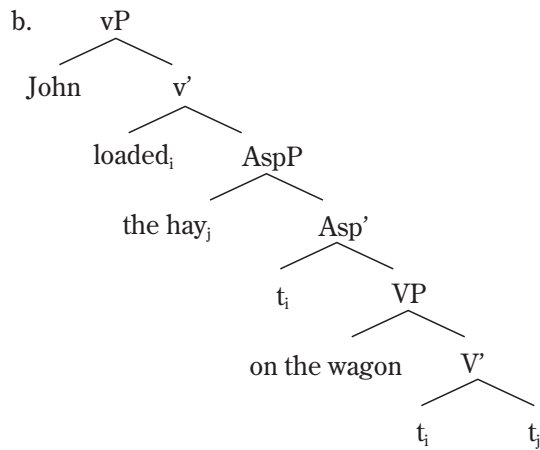
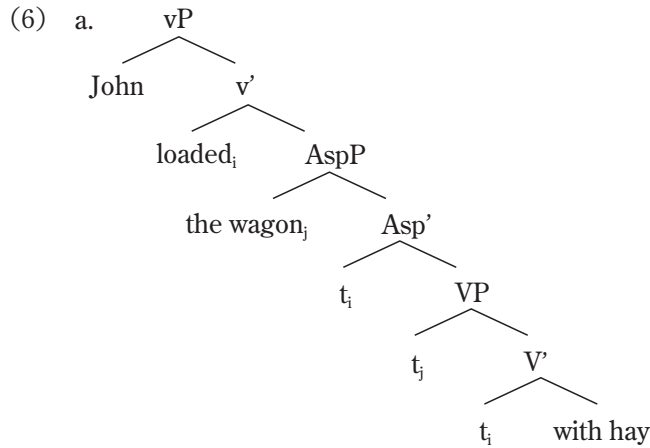


例えば三種類の意味役割がすべてそろったものとして (5) のような場所格交替構文が挙げられる。

- (5) a. John loaded the wagon with hay.  
 b. John loaded the hay on the wagon.

(5) のどちらの例文も、John が《動作主》、the wagon が《場所》、hay が《存在者》の意味役割を担う。(4) の構造に従えば、(5) の動詞句の構造はそれぞれ次のようになる。

<sup>6</sup> Haumann (2007) では動詞句のアスペクト特性の区別を行う機能範疇は *TelicP*、目的語の照合を行う機能範疇は *AgrOP* と区別されているが、Travis (2010) の *AspP* はその両方を行う機能範疇である。Travis を採用している副詞配列の研究としては Edelstein (2012) があるが、Edelstein は付加を認めるという点で Haumann や本稿とは異なる。



それぞれの意味役割を担う項は、基底構造では同じ位置に生起するものの、(6a) では the wagon が目的格を照合するために、(6b) では the hay が目的格を照合するために AspP の指定部に移動している。動詞は V の位置から v の位置へと HMC (Head Movement Constraint) に従って移動する。このようにしてそれぞれの動詞句が出来上がるのであるが、(6a) と (6b) は形が異なるので意味も異なる。(6a) は《場所》the wagon の状態変化に焦点が当たっているのに対して、(6b) は《存在者》hay の位置変化に焦点が当てられていることが一般的に知られている。

加賀は《場所》を表わす項に注目し、次のような原則を提案している。

#### (7) 構造的具現化原則

単純な《場所》の項は前置詞句 (PP) として具現するのに対し、影響を受けた《場所》は名詞句 (NP) として具現する。

(加賀2001 : 144)

加賀によれば、単純な《場所》とは、《存在者》との単なる物理的な位置関係を表わす場所であり、〈場所〉〈着点〉〈起点〉〈経路〉などである。一方、影響を受けた《場所》とは、〈所有者〉〈受取手〉〈受益者〉〈経験者〉〈被動作主〉などであり、《存在者》と単なる物理的な場所以上の動的な関係のあるものであり、その動的な関係から何らかの影響を受けるものであるという。(5a) は《場所》the wagon の状態変化を表わす文なので、この the wagon は変化を被る〈被動作主〉、すなわち影響を受けた《場所》であるから NP として具現し、目的語の位置に移動する。(5b) は《存在者》hay の移動を表わす文なので、《場所》は《存在者》が移動した単なる〈着点〉、すなわち単純な《場所》であるから、PP として具現している。加賀は

《場所》項に関して (7) を提案したが、《存在者》に関する記述を加え (7) の原則を補ったものが (8) である。

(8) 改訂構造的具現化原則

影響を受けた《場所》、すなわち動詞の表わす行為の影響を受けて状態が変化する《場所》は NP として現れ、そうでなければ PP として現れる。影響を受けた《存在者》、すなわち動詞の表わす行為の影響を受けて位置が変化する《存在者》は NP として現れ、そうでなければ PP として現れる。

(藤本2014より、一部修正して引用)

加賀や藤本によって示された (7) (8) の原則から帰結するものとして、本稿では以下の仮説を提案する。

(9) 《場所》項が NP として具現している動詞句では、V は「《場所》の状態が変化する」という意味を表わす。《存在者》項が NP として具現している動詞句では、V は「《存在者》が移動する」という意味を表わす。v は VP 領域によって示される事象を《動作主》が「起こす」という意味になる。

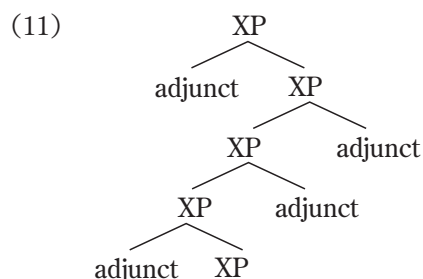
《場所》項が NP として具現している場合、V は「《場所》の状態が変化する」という意味を表わすので、《場所》項はその V に対する主語的な性質を持つということが出来る。英語では一般的に主語はその文の主題である。よってこの場合、《場所》項は VP 領域における主題であるということが出来る。また、《存在者》項が NP として具現している場合には、V は「《存在者》が移動する」という意味を表わすので、《存在者》項がその V に対する主語的な性質を持ち、VP 領域における主題であるといえよう。

統語論では副詞の生起位置を説明するために統語構造上に反映される主題関係が言及されることはよくあるが、副詞の解釈の説明のために《場所》や《存在者》などの主題関係が言及されることは管見の及ぶ限りではほとんどない。(9) は動詞を抽象的な意味構造に分解して表示する語彙意味論における語彙概念構造に似ているが、語彙概念構造が語彙の意味を抽象的に分解し、それを統語構造上に投射するのに対し、(9) の規定は統語構造から導かれるものであるという点で異なる。そういう点においても、主題関係と統語構造の関係から導かれる (9) のような規定が、動詞句修飾の副詞の解釈や生起の可否を考える上で新しい視点を提供すると本稿では主張する。

ここまでは動詞句の構造と意味役割の関係を論じた。動詞句のどこに動詞句修飾の副詞が生起するのかに関して、まずは副詞の付加がどのように起こるのかを考えることとする。副詞を含む付加詞がどのような位置に付加するのかという議論は様々あるが、例えば80年代半ばの議論として、Chomsky (1986 : 6) は以下のように付加を定義している。

(10) 付加は非項である最大投射 XP に対してのみ可能である。

これを樹形図で表すと (11) のようになる。XP は任意の句である。





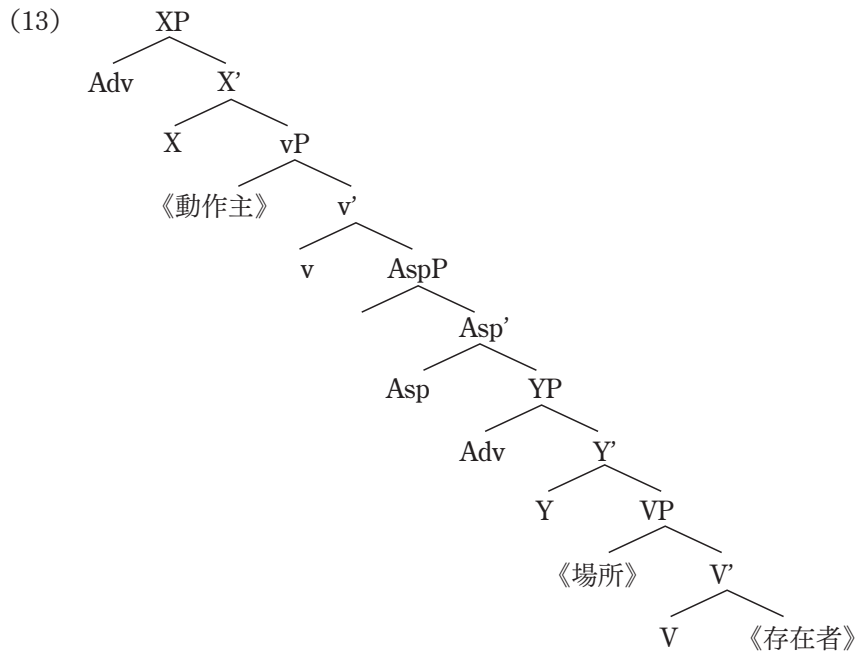
しかし (11) に従うならば、(12) の loudly は左右どちらにも付加されるはずであるが、実際には動詞句末の位置にしか生起しない。

(12) a. She has snored loudly.

b. \*She has loudly snored.

(Haumann 2007 : 34)

このように句構造の左右のどちらにも自由に生起できる付加分析には問題もある。そこで、Kayne (1994) の Linear Correspondent Axiom (LCA) の理論を基盤とした Cinque (1999) の機能範疇指定部分析を採用することとする。Cinque は、統語構造の中には各種の副詞にそれぞれに対応する機能範疇が存在しており、副詞はその機能範疇の指定部に生起すると考えている。副詞が生起するための機能範疇を想定し、その指定部の位置に副詞を位置づける考え方は、(10) のように副詞を付加詞と想定している従来の理論とは一線を画するものであり、右側付加を認めないという点に特徴がある。この Cinque の理論を英語の副詞の分析に応用したのが Haumann (2007) である。Haumann は動詞句修飾の副詞が生起できる機能範疇の位置は、目的格の照合が行なわれる AgrOP と VP の間にあると想定している。(4) においてそれに相当する位置は AspP と VP の間になる。仮にそこにある機能範疇を YP とする<sup>7</sup>。本稿では vP の上にも動詞句修飾の副詞が生じる機能範疇があると考える。仮にそれを XP とすると、動詞句修飾の副詞が生じた場合の構造は次のようになる。



本稿では動詞句の構造と動詞句修飾の副詞の生起位置は基本的に (13) のようになると考える。(13) は Haumann が想定する構造とは多少異なるものの、右側付加を想定しない点などの根本姿勢は共有している。以下では、(9) の仮説と (13) の構造を仮定して具体的な分析を試みる。

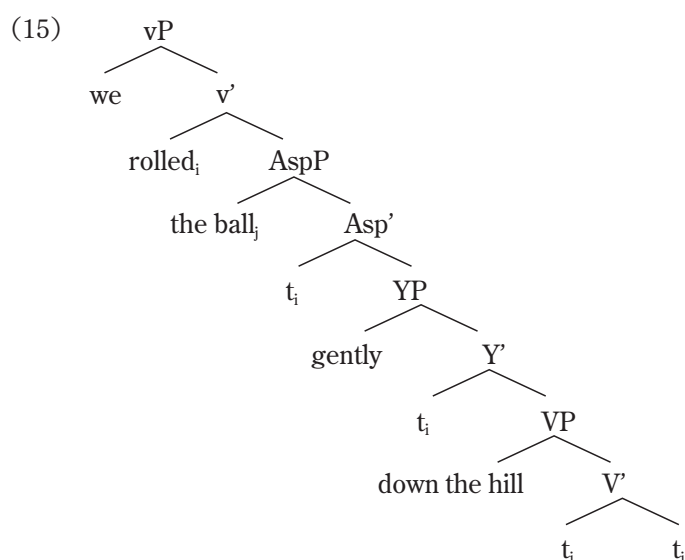
<sup>7</sup> Haumann (2007) ではこの YP を、 $\mu$ P という機能範疇であるとしている。

## 2. 主題関係による動詞句修飾副詞の分析

まず(1)で挙げた文を(14)として以下に再掲し、この文の構造が(9)の規定や(13)の構造でも適切に扱えるかどうか確認する<sup>8</sup>。

- (14) a. We rolled the ball *gently* down the hill.  
 b. We *gently* rolled the ball down the hill.

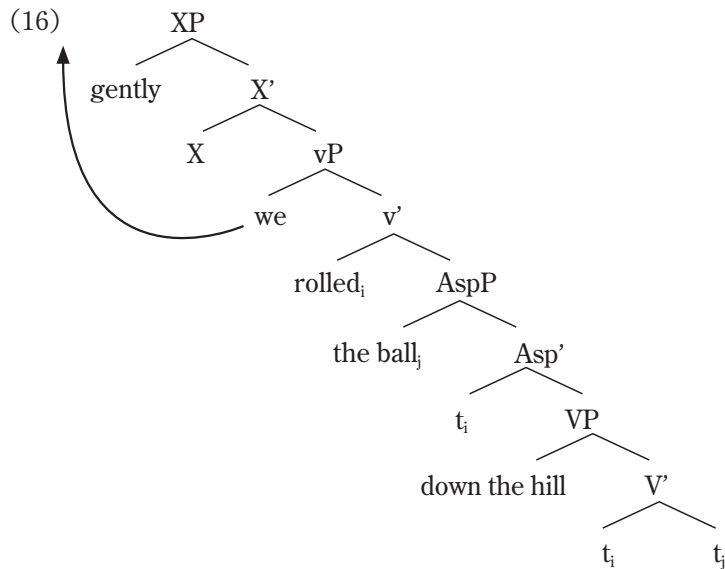
それぞれの項の主題関係は、weが《動作主》、the ballが《存在者》、down the hillが《場所》である。《存在者》がNPとして具現しているので、(9)に従えばVは《存在者》が「移動する」という意味になる。よってVを修飾できるYPの位置に*gently*が生じた(14a)の場合は、「the ballが*gently*に移動した」という意味になるはずであり、実際そうである。その場合の構造は次のようになる。



NPとして具現した《存在者》項は格を照合するためにAspPの指定部の位置へ移動し、Vは使役動詞化するためにHMCに従ってvまで移動する。(15)では示していないが、weは主格の照合のためSpec, TPに上がる<sup>9</sup>。こうして出来上がった語順は、(14a)と同じであることが確認される。次にvを修飾するXPの位置に*gently*が生じた(14b)の場合はどうなるであろうか。vは「起こす」という《動作主》の動作を表わすので、XPの位置の*gently*は「the ballの移動を《動作主》が*gently*に起こした」という修飾を行なうはずであり、実際そうである。その場合の構造は次のようになる。

<sup>8</sup> (14)の文はRadford (1997) や立石・小泉 (2001) などにおいてそれぞれの分析がなされており、本稿の分析も根本的な分析方法は彼らと同じである。ここではあくまで(9)(13)の規定でも問題なく分析できるという点を確認する。

<sup>9</sup> 最近では、動詞句内にある主語の移動は主格の照合のためではなく、EPP素性という素性の照合のためであると考えられることが多いが、主語が動詞句からさらに高い位置に移動することには変わらないので、本稿の議論には影響しない。



we が主格の照合のために gently よりもさらに上に移動するところまでを表わすと、出来上の語順は (14b) と同じである。このように、(14) の例は本稿の仮定によっても分析できることが示された。

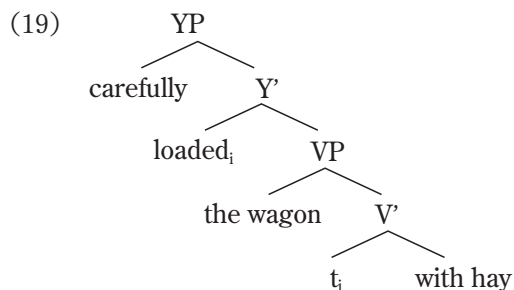
次に、三種類の意味役割が揃った場所格交替構文において、動詞句修飾の副詞の解釈がどのようになるか、そしてそれが (9) の規定や (13) の構造と整合性があるかどうか確かめる。

- (17) a. John loaded the wagon with hay.  
b. John loaded the hay on the wagon.

まずは (17a) のように《場所》項が NP として具現している《場所》の状態変化を表わす構文について見てみる。(17a) の動詞句を修飾する副詞の位置は次の二つが考えられる。

- (18) a. John loaded the wagon *carefully* with hay.  
b. John *carefully* loaded the wagon with hay.

(18a) の *carefully* は VP の位置にあるので V を修飾することになる。*carefully* が VP の位置に併合した後の状態を樹形図で示すと次のようになる。



《場所》が NP として具現しているので、V は状態変化の意味を持つ。よって (19) は「《場所》が *carefully* に変化した」というような意味になるだろうが、これは何を意味するのであろうか。この場合の状態変化は「the wagon がいっぱいになる」という物理的な変化である。《場所》the wagon を見て *carefully* に変化



したと思えるのはどういふときであろうか。例えば the wagon に傷が付いていないようなときなどが予想され、実際「the wagon を傷つけないように気をつけて」といふような解釈となる。よって (18a) は次のような文にするとより状況が明確になる。

(20) John loaded the wagon *carefully* with rocks.

「the wagon を傷つけないように hay を運ぶ」といふ情景は想像しにくい、「the wagon を傷つけないように rocks を運ぶ」といふ状況は思い浮かべるのがかなり容易になるであろう。もちろん、「《場所》が *carefully* に変化する」、すなわち「the wagon が *carefully* に荷物によっていっぱいになる」といふのは、現実世界の状況を考えると「hay や rocks などの《存在者》が *carefully* に積まれた」といふように《存在者》の移動方法に注目した解釈があるはずである。また、実際に積むという動作をしているのは《動作主》なので、「hay や rocks などを《動作主》が *carefully* に積んだ」といふような《動作主》の動作に焦点を当てた解釈も含意されるはずである。しかし実際には何かしらの語用論的、談話的な要素がなければそのようには解釈されないようである。その理由は (18a) や (20) の VP 領域では《場所》項が主題として解釈されるため、the wagon に焦点が当たるからであろう。また《動作主》項に注目した解釈ができないのは、《動作主》の使役的な動作をあらわす *v* も、そして当の《動作主》項も、*carefully* が併合された段階ではいまだ統語構造上には併合されていないからであろう。さらに、YP にある副詞が構造的に上位にある *v* を修飾するのは、被修飾語は修飾語に *c-command* されていなければいけないという一般的な条件も満たしていない。一方、(18b) の *carefully* は XP にあって *v* を修飾しているため、《動作主》の動作を修飾する。すなわち《動作主》John が *carefully* に運んだということであり、例えばゆっくりとした動作で運んだといふような解釈が考えられる。ここでも現実世界の状況を考えると、「the wagon を傷つけないように hay を *carefully* に運んだ」といふ解釈になっても問題ないはずである。しかしこの解釈は、前提や強調がないと難しいようである。つまり (18b) の文から帰結する事実としてそのような解釈をすることは可能であるが、少なくともそれは文そのものが表わす中心的な意味ではないと言える。この理由は、*vP* 領域ではあくまでも《動作主》が主題であり、その《動作主》の動作を修飾するのが XP にある様態副詞の最優先事項であるからであろう。また、XP にある副詞が *v* の代わりに *V* を修飾することができないのは、ミニマリストプログラムで一般的に想定されている経済性の原理から説明できるであろう。すなわちある動詞句修飾副詞が *v* と *V* の両方を修飾できる位置である XP にあるとするならば、その副詞はより近い位置にある *v* を修飾するということになる。

次に (17b) のように《存在者》項が NP として具現している《存在者》の移動を表わす構文を見てみる。この文の動詞句修飾の副詞の位置は次の二つである。

(21) a. John loaded the hay *carefully* on the wagon.

b. John *carefully* loaded the hay on the wagon.

(21a) の *carefully* は *V* を修飾するので、「《存在者》the hay が *carefully* に移動する」といふ意味になり、「hay が崩れないように」や「hay が傷つかないように」といった《存在者》the hay に注目した解釈に基本的にはなる。また (21b) の *carefully* は *v* を修飾するので「《動作主》John が *carefully* に運んだ」といふ意味になるはずである。そして (21) のどちらの文においても「the wagon を傷つけないように *carefully* に運んだ」といふような《場所》に注目した解釈はしにくいということになる。(21) の the hay は、(22) のようにどちらも the eggs などに変えるとより情景が鮮明な例となる。

- (22) a. John loaded the eggs *carefully* on the wagon.  
 b. John *carefully* loaded the eggs on the wagon.

これまで見てきた場所格交替構文とそこに生起する動詞句修飾の副詞の解釈を考えると、副詞の解釈が統語の段階である程度の部分が決定されていることが確認できる。そして、統語の段階で決定される解釈がどのようなものを予測するために (9) のような規定が役に立つことが示された。

### 3. 下位範疇化された副詞の分析

次に、従来の分析において下位範疇化されていると考えられた副詞について考察を行う。

- (23) a. John worded the letter *carefully*.  
 b. The job paid us *handsomely*.  
 c. Steve dresses *elegantly*.

これらの副詞を Jackendoff (1972)、Nakajima (1982)、Haumann (2007) などは様態副詞としている。基本的に、様態副詞は動詞の前後に生起することができる。しかし (23) の例では生起位置が動詞の後ろ側に限られ、さらに文を成立させる上で必要不可欠であるという点で特殊であり、Jackendoff (1972) 以来、これらの副詞は動詞によって下位範疇化されるもの、すなわち項であると考えられることが多い<sup>10</sup>。本稿のように副詞を独立した機能範疇の指定部に位置づける方法をとるならば、副詞が動詞に下位範疇化されるという考えは避けたい。またそもそも、名詞や形容詞、前置詞句は当たり前のように動詞に下位範疇化されるが、副詞はそれらに比べると非常に例が限られており、その制限を説明するための説明がまた必要になってしまう。そう考えると、副詞の下位範疇化という考え自体を避けたい。ここで提案したいのは、様態副詞は通常は動詞の前後に生じるはずなのに、なぜ (23) の様態副詞は動詞の後ろに制限されるのかということ、副詞の下位範疇化という特殊な枠組みを用いずに説明することである。そしてその説明が、動詞句構造と主題関係から導かれた (9) の一般的な規定から可能であると主張する。

ところで Ernst (2002) は (23) の文において副詞が必須なのは、これらの副詞がなければ文の情報価値がないからという談話上の理由を挙げている。逆に言うと、談話上必要なければこれらの副詞が現れなくとも文が成立することがあるということであり、以下によってそれを示している。

- (24) We've figured out the content of all the exam questions, but we haven't worded them yet.  
 (Ernst 2002 : 273)

Ernst の述べる談話上の理由は正しいと考えられるが、その副詞が動詞の後ろでなければならないということには直結しない<sup>11</sup>。

ここで (23) の各文の主題関係をまず確認する。本稿では主題関係として、加賀理論を採用する。よって (23a) の John は《動作主》、また the letter は行為を受けて状態変化をする〈被動作主〉、すなわち《場

<sup>10</sup> Haumann は様態副詞はそもそも動詞句の後ろ側にしか生起できないと考えるので、前に生起できないのは当たり前であるとしてこの問題を片づけている。

<sup>11</sup> 鈴木 (2014 : 78-84) のように、文末重心の原理などを利用した機能的説明も可能であろうが、本稿では統語構造と主題関係から派生した (9) の仮説から説明可能であることを主張する。

所》である。(23b) の主題関係は、the job が《動作主》、そして us は行為を受けて状態変化をする〈被動作主〉、つまり《場所》である。(23c) では Steve が服を着た状態に変化する〈被動作主〉、すなわち《場所》である。ただし (23c) は次の (25) のようにパラフレーズできる。

(25) Steve dresses himself *elegantly*.

よって (23c) の Steve は着る動作を行う《動作主》とも解釈できる可能性があるが、(23c) の文脈の場合は《場所》解釈だと考える。その理由は、この場合の dress が状態動詞であり、動作を表わさないからである<sup>12</sup>。Steve を《場所》とすれば、文に現れていない衣服やファッションスタイルが《存在者》となるであろう。ただし明示的に現れていない抽象的な意味役割は、統語構造上には反映されないと考えられるので、実際の分析においては明示的に現れた主題関係のみを対象とする。

それでは (23a) を (26) として再掲して分析していく。

(26) John worded the letter *carefully*.

(26) の《場所》the letter は NP として具現しているので、(9) に従うと、(26) の V は the letter が「状態変化する」という意味を表わす。v はそのような状態変化を「起こす」という意味になる。carefully は YP にあるので V を修飾することになるが、the letter の状態変化が carefully に起こるとはどういう意味であろうか。この場合の the letter の変化とは、物理的な変化というよりは抽象的な情報(量)の変化である。情報が加わって状態が変化した the letter を見ることによって carefully だとわかるのは、そこに書かれている内容が丁寧であったり、適切であったりする場合であろう。もし動詞の前にあって v を修飾するとしたら、「carefully に引き起こした」という《動作主》の動作を修飾することになる。《動作主》の動作を見ることで carefully だと分かるのはどういう場合かということ、例えば顔を近づけてペンをゆっくり動かしているような場合であろうし、目に見えない心的態度かもしれない。このような意味の差を考えたいので、Ernst の提案する談話上の理由を加えれば動詞の後ろに生起することが説明される。つまり、手紙は普通言葉によって情報が加えられるものであり、ただ word the letter と言っても情報的に無価値であるから何らかの追加情報が必要となる。加えられた情報がどのようなものであるかを示す語句が必要であり、その追加情報が例えば (26) では YP にある carefully である。XP にある carefully では《動作主》の動作を修飾することになり、談話上必要な手紙の情報が文に存在せず非文となるのであろう。このように考えると副詞の下位範疇化分析は必要なくなる。

次に (23b) を (27) として再掲して分析していく。

<sup>12</sup> (i) は *Oxford Advanced Learner's Dictionary (6th edition)* から引用したこの用法の dress の定義であり、(ii) (iii) は用例である。

(i) to wear a particular type or style of clothes

(ii) to dress well/badly/fashionably/comfortably

(iii) She always dressed entirely in black.

dress には動作動詞用法もあり、この辞書ではその場合の意味を put on を用いて定義していることから、(i) の用法の dress が状態動詞であることが確認される。ところで (iii) を見ると、場所を表わす前置詞 in を主要部とする in black が《場所》を担い、She が《存在者》のようにも思える。それと同様に考えるならば、(23c) の Steve も《存在者》と解釈すべきように思える。しかし本稿が仮定している加賀の意味役割理論では、性質や状態を表わす形容詞や前置詞句に《存在者》という意味役割を与えるのであった。そうだとすれば、(iii) の in black は《存在者》、She は《場所》であり、それと同様に考えて、(23c) の Steve は《場所》と考えるのが妥当になる。

(27) The job paid us *handsomely*.

(27) の《場所》us は NP として具現した影響を受けた《場所》なので V は状態変化を表わすが、この場合は「お金のある状態に変化する」ということになる。この文は、「この仕事はかなりのもうけになった」という意味なので、*handsomely* は実際には様態の副詞ではなく、状態変化の程度を表わす完結性程度副詞であり、「お金がある状態に変化する」その変化の程度が *handsome* であったということである。よって *handsomely* は使役動詞 *v* を修飾する XP の位置ではなくて、状態変化の意味を持つ V を修飾するので YP の位置に生起する必要がある<sup>13</sup>。このように、(23) は副詞の種類をそもそも様態副詞とひとくくりにすることができない。統語的分析では Jackendoff (1972) 以来これらの副詞の種類に対してあまり注意が払われていなかったことは問題であろう。いずれにせよ、(27) の *handsomely* に関して、下位範疇化を想定せずに分析することができた。

次に (23c) を (28) として再掲して分析する。

(28) Steve dresses *elegantly*.

(28) は《場所》Steve が NP として具現しており、V は Steve の状態変化を表わすことになる。この例の *elegantly* も、状態変化の結果を修飾しているという点で単なる様態副詞とは分類できない。例えば Geuder (2000) は (28) の副詞を、次の例の副詞と同じく結果副詞と分類している。

(29) a. They decorated the room *beautifully*.b. They loaded the cart *heavily*.

(Geuder 2000 : 69)

これら結果副詞は状態変化の程度ではなく、状態変化の結果を修飾している点で完結性程度副詞とも同列には扱えない。本稿の枠組みでは、《場所》項が NP として具現している場合にのみ、V は「状態が変化する」という意味になると予測するのであった。ということは、状態変化の結果を修飾する結果副詞は、《場所》項が NP として具現する場合にのみ、V を修飾できる YP に生起するということになる。よって (28) の *elegantly* の生起位置は動詞の後ろ側に限定されることが正しく予測される。また *elegantly* 以外の結果副詞も動詞の後ろ側に生起することが予測され、実際に結果副詞は基本的には動詞の後ろ側に生起するため、下位範疇化分析を持ち出さずに (9) の規定のみによって (28) (29) の結果副詞の基本的な生起位置を正しく予測できる<sup>14</sup>。そしてこの分析は〈被動作者〉を《場所》として、性質や状態を表わす形容詞や前置詞句を《存在者》として扱う加賀の提案を採用することではじめて可能となるのである。

<sup>13</sup> 鈴木 (2014 : 83) によれば、主語が人である場合は *handsomely* が動詞の前に生起することがあるという。

(i) He *handsomely* paid us.

しかしこの場合の *handsomely* は *v* 修飾の様態の副詞で、「気前よく支払った」という意味だと考えられる。(27) で *v* 修飾の様態副詞が生起できないのは、「気前よく」という意味を認可できる動作主性を *the job* に求めることが困難だからだと考えられる。

<sup>14</sup> Geuder (2000) の意味的考察や、鈴木 (2014) の機能的考察をここで扱う余裕はないが、彼らは結果副詞が基本的に動詞の後ろ側に生起することと、例外的に動詞の前に生起することの両方を意味論・機能論的に説明している。本稿では、結果副詞が動詞の後ろ側に生起することは、主題関係に基づく統語構造から予測されることであると主張する。また、前に生じる場合は談話などの要請によるものであると考えることになるが、それは今後の課題とする。



## 4. まとめ

本稿では動詞句を修飾する動詞の生起位置と解釈について統語論の観点から分析を行った。

1節では、加賀(2001)・Kaga(2007)が提案している動詞句の構造と意味役割理論と、Travis(2010)の想定する split-VP とを合わせた構造を考え、そこから帰結するものとして(9)と(13)を仮定した。

2節では、(9)(13)の仮定が、従来すでに十分に分析できていた例をきちんと分析できるかをまずは示した。その次に場所格交替構文に生じる様態副詞の分析を行い、副詞の意味解釈を正しく予測できることを示した。

3節では、従来は下位範疇化されたものと分析されてきた副詞に対して、副詞の下位範疇化という特殊な分析をすることなしに説明可能であることを示した。またその過程において、完結性程度副詞や結果副詞として分類される副詞が、基本的に動詞の後ろ側にのみ生起する理由を(9)(13)から説明することを試みた。

このように動詞句を修飾する副詞のいくつかの分析を通して、(9)(13)の仮定の妥当性を示した。

## 参考文献

- Baker, Mark (1988) *Incorporation: A Theory of Grammatical Function Changing*, The University of Chicago Press, Chicago.
- Chomsky, Noam (1986) *Barriers*, MIT Press, Cambridge, Mass.
- Chomsky, Noam (1995) *The Minimalist Program*, MIT Press, Cambridge, Mass.
- Cinque, Guglielmo (1999) *Adverbs and Functional Heads*, Oxford University Press, New York.
- Edelstein, Elspeth (2012) *The Syntax of Adverb Distribution*, Ph.D. Dissertation, University of Edinburgh. [available at < <https://www.era.lib.ed.ac.uk/handle/1842/7919>>]
- Ernst, Thomas (2002) *The Syntax of Adjunct*, Cambridge University Press, Cambridge.
- 藤本滋之 (2009) 「主題関係に基づく結果構文の分析」『西南学院大学英語英文学論集』49, 79-106.
- 藤本滋之 (2014) 「主題階層、VP-shell、Split VP と諸構文の派生」日本英文学会九州支部第67回大会シンポジウム(福岡女子大学) 発表原稿
- 藤田耕司・松本マスマ (2005) 『語彙範疇』研究社, 東京.
- Geuder, Wilhelm (2000) *Oriented Adverbs: Issues in the Lexical Semantics of the Event Adverbs*, Ph. D Dissertation, Universität Tübingen. [available at <<https://publikationen.uni-tuebingen.de/xmlui/bitstream/handle/10900/46179/pdf/geuder-oriad-verbs.pdf?sequence=1>>]
- Hale, Kenneth and Samuel J. Keyser (1993) “On Argument Structure and the Lexical Expression of Syntactic Relations”, *The View from Building 20: Essays in Honor of Sylvain Bromberger*, ed. by Kenneth Hale and Samuel J. Keyser, MIT Press, Cambridge, Mass.
- Haumann, Dagmar (2007) *Adverb Licensing and Clause Structure in English*, John Benjamins, Amsterdam.
- Jackendoff, Ray (1972) *Semantic Interpretation in Generative Grammar*, MIT Press, Cambridge, Mass.
- 加賀信広 (2001) 「意味役割と英語の構文」米山三明・加賀信広『語の意味と意味役割』第II部, 研究社, 東京.
- Kaga, Nobuhiro (2007) *Thematic Structure: A Theory of Argument Linking and Comparative Syntax*, Kaitakusha, Tokyo.
- Kayne, Richard S. (1994) *The Antisymmetry of syntax*, MIT Press, Cambridge, Mass.
- Nakajima, Heizo (1982) “The V4 System and Bounding Category,” *Linguistic Analysis* 9, 341-378
- Radford, Andrew (1997) *Syntactic Theory and the Structure of English: A Minimalist Approach*, Cambridge University Press, Cambridge.
- 鈴木博雄 (2014) 『英語副詞配列論』ひつじ書房, 東京.
- 立石浩一・小泉政利 (2001) 『文の構造』研究社, 東京.
- Travis, Lisa (2010) *Inner Aspect: The Articulation of VP*, Springer, Dordrecht.